

News Letter No. 59

22年5月31日(月) 発信

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト (加藤早稲子) e-mail: sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



タイ一番の米どころ、トゥンクラロンハイ

(撮影：新田栄治)

農業にとって不利な条件下にある地域の
生き残り戦略 - 新塩鉄論 -

新田栄治 (鹿児島大学法文学部)

農業にとって不利な条件下にある地域の 生き残り戦略 - 新塩鉄論 -

新田栄治（鹿児島大学法文学部）

東北タイはコーラート高原とほぼ同じ地域です。コーラート高原は太古の昔、海底であったものが地殻変動によって上昇して、標高 200m前後の高原となったものです。そのために、上昇とともに海水も一緒に持ち上げられた結果、地下には膨大な塩があります。コーラート高原の東側にはチュオンソン山脈、西側にはプーウィアン山脈があるために、海洋から来る季節風はその外側に雨を降らし、コーラート高原には水分を減らした風が来る。そのため、思いのほか乾燥した気候条件下にある。また、レイン・シャドウとなって降雨が少ないところもある。乾燥気候に加えて、熱帯に特有な風化土壌のラテライトが地下にある。これら、乾燥気候、少ない雨量、地下のラテライトと塩という農業にとっては厳しい条件がそろった地域です。

東北タイの先史時代の遺跡は地上にマウンド状をなしており、その周囲をめぐる濠をもつものが多い。マウンドは人工的に盛り上げられた結果であり、環濠も人為的に掘ったものです。雨季に年間降雨量のほとんどが降るこの地域では、住居が水没しないように高くする必要があり、また過剰の水を貯水し、乾季の生活用水の枯渇に備えて環濠が必要でした。地下水が塩水のために、井戸は生活用水としては使えないからです。また、灌漑用水として使った形跡もありません。せいぜい、居住地内の周辺部に作った菜園にやる水を汲むくらいです。

東北タイ南部のブリラムからスリンにかけての広大な水田地帯であるトゥンクラロンハイ地域が開発されたのは最近のことであり、基本的にコーラート高原では起伏が多い地形もあり、谷間の小地域を除けば稲作には不向きでした。トゥンクラロンハイという地名は、かつてタイ・ヤイ族の集団がこの地域にやってきたときに、行けども、行けども荒涼とした不毛の地が続いていたので、悲観して泣いたという伝説からつけられた地名です。ちなみに、トゥンクラロンハイ産の米は、現在タイで最高品質のコメとして評価され、価格も高いです。またコーラート高原の森林地帯を行くと、林間田と呼ばれる、森林のなかに畔をもった小区画の水田が見られますが、これらもごく最近の開発行為の結果であり、先史時代には存在しなかったものです。



ノントウンピーポン製塩遺跡の鹹水ろ過装置

このような稲作不向き地域であれば人口密度が少ないのが普通ですが、新石器時代以来、歴史時代にいたるまで、相当数の遺跡が分布しており、生態的条件と遺跡数のギャップに説明が必要となってきます。この不利な条件の克服のために、塩と鉄を生産することによる適応戦略がとられました。地下の塩は水分の上昇によって地表面に現れ、乾季には地表面が一面真っ白になるくらいの塩の結晶が生じます。この塩の結晶を土ごとかき集め、独特の濾過槽に入れて、水で溶かして鹹水とし、これを煮詰めることによって塩を作りました。このような東北タイ独特の製塩法による製塩がおこなわれていた遺跡はスポット状に分布しています。また、鉄鉱石とともに、ラテライトの鉄イオンが土中の粘土粒に凝集して、酸化鉄の外皮を形成したきみょうな粒（私は鉄ノジュールと呼んでいます）が製鉄の原料として使われており、このような製鉄遺跡も分布しています。いわば、先史時代の地下資源利用による適応戦略がとられていたと考えられます。製鉄は今では行われていませんが、独特の製塩は今でも行われており、乾季の収入源として意味を持っています。現在の塩価格は日本と同様に安いものですが、13世紀でも米の1.5倍の価値があったという記録があるので、さらに昔にはもっと価値が高かったはずです。



バンドンブロン遺跡の製鉄炉



今も独特の製塩を行っているモーさんの製塩場

このような東北タイですが、現在では灌漑用巨大ダムが各地に建設され、かつてのような地域ではなくなりました。

中国漢代に専売制に関する儒者と官僚の論争があり、専売否定派である儒者の立場から書かれた『塩鉄論』という書物がありますが、これをもじって、コーラート高原でかつて行われていた適応戦略を「新・塩鉄論」と自称しています。